

わがままじゃない、権利です！ CEDAW が紡いだ言葉のパワー、 あなたはどうかす？

福田 和子

2024年10月、スイス・ジュネーブの国連欧州本部にて、8年ぶりに女性差別撤廃委員会(CEDAW)による日本審査が行われた。私は国際協力 NGO ジョイセフ等6団体と執筆したSRHR 市民社会レポート「日本における性と生殖に関する健康と権利」を手にジュネーブに飛んだ。初めての国連、初めてのCEDAW。委員に日本のSRHRの現状や課題を伝えるべく渡航したわけだが、一体どんな人たちなんだろう、私たちの訴えが反映されるなんてあるのだろうか。内心不安だった。

「声を届けてくれてありがとう」。それが、私たちが委員から受け取った言葉だった。限られた時間でも領きながら話を聞いてくれ、レポート要約で割愛した内容まで質問された。政策提言で絶望でなくエンパワーされるなんて！SRHR 実現の活動開始から7年、初めての経験だった。現地には日本から私たち以外にも、障害、部落、アイヌ、在日コリアン、沖縄、性的マイノリティ…あらゆるマイノリティ属性をもつ人たちが約100名集結した。他国にはない現象らしい。なぜか。それは日本が選択議定書を批准しないからであり、独立した人権機関がないからであり、結果、ここに来るよりほかにないからだ。CEDAW 委員が練り上げた「最終所見」は、さすが「世界の女性の憲法」。あらゆる人びとの切実な訴えが反映されていた。SRHR についても、トランスジェンダーの人びとの権利を含め、さまざまな課題が取り上げられた。しかし2025年1月、皇室典範への勧告を問題視する日本政府はCEDAW を任意拠出金使途から除外し、委員の訪日プログラムの実施を見合わせると発表。この判断はCEDAW はもちろん、そこでしか^{すく}あがらない声を必死に上げた人たちに対しても、大きな冒涇だと私は思う。

2025年は、今後5年の男女共同参画を形作る「第6次男女共同参画基本計画」策定年、夏にはパブリックコメントもある。CEDAW のバトンは日本政府、そして私たちの手に渡された。よりよい未来を作るため、パワーに満ちたその言葉を、さあ、あなたはどうか使う？



PROFILE

ふくだかずこ：スウェーデン留学をきっかけに、2018年よりSRHRの実現を目指す「#なんでもないプロジェクト」を開始。国連人口基金ルワンダ事務所勤務等を経て、現在は東京を拠点に執筆・講演・政策提言を行う。#緊急避妊薬を薬局でプロジェクト共同代表、FIFTYS PROJECT 副代表。2024年より東京大学ジェンダー・エクイティ推進オフィス特任研究員。著書に『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』共同翻訳。